

図書館だより

No.82 July, 2013



目次

巻頭エッセイ	ららら科学の子	機械工学科	藤田 雅俊	1
読書のすすめ	視点を変える	機械工学科	青野 雄太	2
	本の読み方を教えない公立学校	電気電子工学科	加藤 直孝	3
	本との付き合い	一般科目理科	松田 康雄	4
私の一冊			各学科学生6名	5
リレー連載<古典への誘い>	古典幾何から現代幾何へ	一般科目理科	高橋 正郎	7
平成24年度後期図書館利用状況				8
Information	編集後記			9

巻頭エッセイ

ららら科学の子～論理的な思考と構成のスキル～



機械工学科 藤田 雅俊

文体・・・ここではそのことを書こうと思っている。どのような作家の文章もそうであると思うが、それを執筆した時期や年代によってその文体は変化する。プロの作家の場合は意識的に文体を使い分けることも職能の内である。しかし文体には書き手の生理のようなニュアンスがにじみ出て、それが受け入れにくいことがある。読み手にとって文体から受ける印象は、例えば漫画の絵のタッチのようなものかもしれない。ストーリーや人物像は魅力的なのに、文体が合わないため読後感が悪いという作品も、私の場合間々ある。その点で文体とは、私の専門とするデザインの分野でいえばスタイルに当るかもしれない。スタイルは必ずしもデザインの本質ではないが、その役割は大きい。姿はきれいだけどもんなもの要るのかというものもある。デザインのコンセプトとスタイルが一致した時、その価値は比類のないもの感じられるが、極めて稀である。本稿で紹介するのは35年の時を経て、一冊の本で再会した文体の話である。

高校の頃の私は、あまり勉強に身が入るわけでもなく、毎晩机に向かいながらラジオと共に無為な時間をやり過ごしていた。その頃は、毎晩FM東京（今はTOKYO FMというらしいが）を聴くのが日課になっていた。23時から5分間くらいの短い番組で『あいつ』という連続朗読劇があり、これにハマった。『あいつ』という主人公が出てきてちょっとした事件やトラブルに関わるというストーリーが、延々と続いて行く話だった。ナレーションをしていた日下武（劇団四季の創立メンバー）という俳優の声が決くて、短いセンテンスで継がれる物語の展開と共に、毎夜聞き逃さなくなった。『あいつ』の正体は終いまで分からなかった。番組の最後にスクリプト・矢作俊彦という紹介があり、知らずのうちにその名前が頭に刻まれていた。矢作俊彦のスクリプトは、『あいつ』の終了後『マンハッタン・オブ』というニューヨークのプライベート・アイのシリーズに受け継がれた。

大学に入ったばかりのころ、本ばかり読んでいた同級生がいて、倫理学か何かの授業と一緒にいると、今読んでいるという本の内容を熱っぽく語ってきた。彼の好みは所謂ハードボイルドで、勧められた1冊に『マイク・ハマー伝言』というのがあった。作者は矢作俊彦・・・どこかで聞いた名だ。

本を読んでから、FMで聴いた『あいつ』の作者だと確信した。マイク・ハマーはミッキー・スピレインの小説に出てくる探偵の名前だが、この本の主人公の通り名ともなっている。横浜の元不良少年たちが主人公の話で、素直に面白かったのを憶えている。これ以降矢作俊彦の著作は大学を出るくらいまでは欠かさず読んでいた。第2作『リンゴォ・キッドの休日』以降に出てくる神奈川県警の刑事・二村永爾のシリーズは、ハマっぼさが少し鼻につく感じはあるものの、日本の刑事ものの小説としては、それまでにない醒めた印象を与える文体が新鮮だった。そして矢作俊彦が私より10歳年上の、教育大付属駒場高卒の作家であること。デビューは17歳の時で漫画

家であったことなどを知った。その後、漫画家大友克洋の『気分はもう戦争』の原作を書いたりしている。

就職してから随分と矢作俊彦とは縁遠くなっていた。久留米高専に赴任して暫くした頃、学校の図書館で『ららら科学の子』という背表紙を見た。「らららか～が～く～のこ～」と云えば鉄腕アトム・・・。装丁には確かに鉄腕アトムの漫画が施されている。視線を下げると著者名に矢作俊彦・・・どこかで聞いた名だ。

矢作俊彦と手塚治虫？一体どんな糸で結ばれたんだ？という思いで本を借りた。読んで分かったのは『ららら科学の子』は科学の本ではないということ。そこには矢作俊彦の年代だから見渡せる世界観や世相感が曼荼羅のように描き出されていた。移ろってゆくシーンのひとつひとつが後悔であり、怒りであり、懺悔であり、失望であるが、諦めはない。ドラマチックで感動的な出来事はないが、35年前にラジオで聴いていた連続劇『あいつ』のように淡々と情景が綴られる。この本には矢作俊彦が歩んできた、そして日本というコミュニティーが経てきたマイルストーンがあった。ここでの語り口ともいうべき文章は、飾りを排除し、湿度を低く抑えたものだ。歳月を経て再会した文体は、おそらく彼にとって多少なりとも個人的思いの込められたテーマを、三人称で記述している。が、その視点は主人公自身のものであり、主体と客観が混然とした表現で、私はその追体験に没頭した。

10歳年上の彼の「ものがたり」を読みきることは難しいが、筋肉質の文体が主人公の感情をも冷静に縁どる。矢作俊彦のスクリプトとはFMの深夜番組以来の付き合いだが、以前の作品とは一味も二味も違う凄みと旨みを感じさせてくれた。ここでは紹介できない他の著作では、矢作俊彦は思いもよらないストーリーテラーとしての多能ぶりを発揮している。表現の幅が広がるということは、考察の深みが増してくることもあると考えさせられた。主旨を最適な文体で表現することは職業作家でも難しいことであると思う。デザインという稼業をしていると、スタイルから入ることに抵抗感を感じることもある。どこかものまねっぽい気がするからだが、時間をかけスタイルを磨くことで、創作する上での思考方法が研ぎ澄まされるということもある気がする。特にラストの結構は、作家矢作俊彦の経てきた時間が紡ぎだした情景であるようにも感じられた。私には何かを暗示してくれているような気もする。

最後に『ららら科学の子』は科学も技術もアニメも直接的には何の関係もない本である。何らかの因果はあるかもしれない。タイトルに騙されて読んでみるのも良いと思うが、つまらなかったと言って批判を受ける筋合いではないことを記しておきたい。あわせて、なぜ本のタイトルが『ららら科学の子』なのかは、読んだ人間にだけ、想いをめぐらす権利があることも・・・。



特集 読書のすすめ

視点を变える



機械工学科 青野 雄太

昨年、3ヶ月間ドイツへ留学する機会をいただいた。風力発電に関する研究所にお世話になり、自然エネルギー普及と脱原発を推し進める現場を見ることができた。固定価格買取制度を中心とした政策全体が実験と言ってもいいと思う。だから多少の痛みやひずみはある。しかし、壮大な目標があるので活気がある。一方、日本では残念ながらエネルギー問題の本質に迫る議論がほとんどないと感じる。枯渇性資源に依存した社会に展望がないことは明らかなのに、痛みを将来へ引き継ごう、あるいは先延ばししようとしているようにしか見えない。

なぜこれほど違うのか、いろいろな要因があると思うが、ドイツでは異なる考え方を排除しない傾向にあることが関係していると思う。自分の主張を持ちつつ議論がかみ合うよう視点を变えられる人が多い。日本でも有意義な議論が増えて欲しいと思う。

ようやく本題だが、読書は異なる意見を吟味するのに適していると思う。少数派あるいは特異な考え方は本が最も多いと思うし、しばらくして読み返すこともできる。テレビやネット上の情報は吟味という点では本に劣ると思う。以下では、新たな視点をもつきっかけ作りに良さそうな本や雑誌を列挙したい。「読書のすすめ」ではなく、単に私が好きな本や雑誌というだけかもしれない。

○「Sports Graphic Number」、文藝春秋

「江夏の21球」に代表される名作も生まれた隔週のスポーツ雑誌である。スポーツ選手の意外な側面といった興味本位のテーマだけではなく、戦術分析やチーム作り、マイナー競技の育成や普及、ビジネス戦略、オリンピックのあり方など、テーマは多岐に渡る。ばらつきはあるが、そのスポーツについてほとんど知らなくても読めることと、内容の深さの両立を目指した記事が多いと思う。一方で、某球団礼賛の記事しか書かない記者も継続的に載っていたりする。もし嫌いなスポーツがあるなら、Numberのそのスポーツに関する記事を読むと見方が変わるかもしれない。

○「世界」、岩波書店

久留米高専に赴任後、初めて図書館へ行ったとき、こ

の雑誌が置いてあり嬉しくなった。テレビのニュースや新聞報道にない大切な内容が載っていると思う。変わった所では2011年12月号のアントニオ猪木氏へのインタビュー記事がある。日本政府から反対されることもあった中、何度も北朝鮮へ行った様子が語られている。どんなやり取りがあったか知る人はほとんどいないだろう。清廉潔白な人ではないと思うが、外交の基本は対話であることがよくわかった。ヨーロッパの議論上手に通じるかもしれない。いずれにしても昨今の日本政府の対応の拙さには失望する。岩波「科学」は自然科学分野の雑誌で「世界」と同様に面白い雑誌であるが、置いてある図書館が少ないのは残念だ。

○「放送禁止歌」、森達也、光文社知恵の森文庫

放送禁止になる歌の基準は何か、読み進めていくと具体的には何もなかったことがわかる。報道機関の「空気」で禁止されてしまう。世の中に溢れる情報は何を伝えているのか考えさせられる。この著者は通常タブー視されるテーマをよく取材する。多少くどいと感じることもあるが貴重な記者だと思う。

○「わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か」、平田オリザ、講談社現代新書

全く知らなかった劇作家の著書で友人に勧められて読んだ。教育に関する話題もあり、勉強になった。もう一度読み直したい。本稿の冒頭で、エネルギー問題に関して日本では議論がないと書いたが、著者の表現だと、会話はあるが対話はない、となるだろう。そういえばガリレオの「新科学対話」では登場人物の対話という形で物理現象が説明されている。コミュニケーション能力向上方法を直接教えてくれるわけではないが、会話と対話の違いを意識するだけでも日々気楽に過ごせるようになると思う。この本を読む前、演劇には何の興味もなかったが、機会があれば見てみたいという気持ちになった。

いくつか挙げてみたが、頑固な人が視点を变えてみようと思っても説得力はない。良い本を見つけて様々な考え方に触れたいと思う。

特集 読書のすすめ

本の読み方を教えない公立学校



電気電子工学科 加藤 直孝

私は、40才を過ぎて初めて本や文章の読み方を知った。慶應SFC（SFCは湘南藤沢キャンパスの略称で、学科名は慶應義塾大学大学院政策メディア・研究科である）の修士課程の授業の中で教わった。その授業の名前は「Critical Reading」。大学院の約10人程度の小クラスだ。その先生の名前はアラン・マコーニク。先生の教え方はこうだ。まず、最初の授業で10数ページの英語の雑誌記事のコピーを学生に渡す。「Atlantic Monthly」（実際にマコーニク先生はこの記事をよく使った）にあるようなそれなりのレベルの英文だ。そして、5分でこの記事を読んでくださいと言って、先生はどこかの部屋へ消えて行く。そして、5分か10分か経つと戻って来て、そこには何が書かれていたかを質問する。

最初の授業で毎年同じことをするそうだが、ほぼ100%の日本人学生が決まった行動を取るそうだ。私もその例外ではなかった。日本人学生は、記事の頭から英文を読み進み1ページ目を読み終わらないうちに時間切れとなるのである。これが日本の教育を受けた者の行動パターンだ。5分で読めと言われていたのだから、頭から順に読むではいけなかったのだ。5分で何を述べているかを知るためにScan Readingをする必要があった。たとえば、この記事は事実を述べているのか、それとも意見を述べているのか、数値データで述べているか、そうならそのデータの出典はなにか、冒頭部分の記述と末尾の記述で何を述べているかなど、まずは、Scanすることからはじめる必要があったのだ。

英文を読む場合、日本人の英語の先生は辞書をちゃんと引くようにと教えてくれる。ところが、マコーニク先生が教えてくれたことは、A dictionary is an enemy. なるほど「Scan reading」に辞書は敵だ。辞書は重要だが、使い方を間違えてはいけない。

話しはそれだが、私は、学生に「ロングマン英和辞典」を勧めている。「通販生活」では売っていないが、2007年以後、英和辞典ではピカイチの存在だ。

話を戻すと、本も同じだ。まず、1分見る。1分見て、5分見る価値があるかどうかを判断する。そして、5分Scanしてみる。そして、必要があれば、20分読めばよ

い。さらに必要があれば、2時間読めばよい。それが本の読み方だ。

もっと違う本の読み方もある。「The Photoreading Whole Mind System」などは、いまや世界の常識だ（と言うと言いすぎだろうか？）。日本語の翻訳は「あなたもいままでの10倍速く本が読める」（フォレスト出版）で、タイトルも、出版社もいかかわしいと思うかもしれない。しかし、図書館で借りて読む価値はあると思う。

私は、市立の小中学校、府立の高校、国立の大学、と日本の公立学校に学んだ。しかし、本の読み方を教えてくれることはなかった。本について教えてくれたことは何かと考えてみると、本を投げてはいけない、本をまたいではいけない、本に落書きをしてはいけない。今考えてみると、その誤った教育によって、本を捨てられないでいるように思う。もっとも、教員になってからは、捨てなくてよかったと思う本だらけで、よい教えでもあったと思う。

所詮、本は「トイレットペーパー」の原料に過ぎない。どうせ最後は「トイレットペーパー」に変わるものであれば、どこかの先生のように3色ボールペンは使わないまでも、どんどん落書きをすればよいのだと思う。図書館の本に落書きをしてはいけないが、自分の本なら自由に使えばよい。

日本IBMで私と5年間オフィスを共有した先輩がいる。なぜか運よく2人で1つの部屋を共有した。彼は頭がよく、なんとアメリカ人が日本人の彼に英語の添削を頼みにくる。彼なら私が今書いているこの文章を10秒で頭から終わりまで全部を読めると思う。彼はA4に印刷された英文emailも10秒で読んでいた。その先輩は、今は米国IBM Researchにいる。私の師匠である慶應の先生も同様の読み方をする。Scan Readingではなく、10秒で内容をすべて理解しているのだ。そのような読み方が存在するのである。先輩の彼からも、師匠からも教わったことはないが、私はたまたま真似をする。どうやら、私は修行が足りないようです。南無阿弥陀仏。

特集 読書のすすめ



本との付き合い

一般科目（理科系・数学） 松田 康雄

読書の勧めにはなりません、本にまつわる思い出を書きました。

「シャーロック・ホームズ」シリーズ（コナン・ドイル著、新潮文庫）は小学生の頃から繰り返し読んでいる本です。時間と場所を越えた100年前のロンドンが舞台です。主な通信手段が電報、交通手段が馬車なのですが、推理内容自体は今と変わらない所が面白いと思います。

「踊る人形」での暗号は記号と文字の1対1の対応、たくさん使われている文字からヒントを得るといのはいつの時代でも大体同じだと思います。「赤毛連盟」のミスティレクションは、騙された感があって好きです。

「白銀号事件」で起きるべきことが起きなかったことから事件を解決したことも時代を超えた推理で素晴らしいと思いました。ライバルのモリアーティ教授は数学者なのでつい肩入れしてしまいます。しかし現実の数学者は、余り悪企みはできないと思います。

大学4年生の時、「数論講義」（J.P.セール著、岩波書店）という数学の専門書を読みました。ゼミで輪読して、交代でその内容を発表します。次が自分の順番という時、どうしてもつじつまが合わない箇所がありました。一週間考え続けたのですが、ついに分かりませんでした。仕方なく、ゼミの教授に告げたところ、一言「印刷ミスだよ。」という返事でした。（現在は訂正されています。）この本を見る度「活字を信用するのではなく、自分の頭で考える」ということを肝に銘じています。

子どもが小さい時はよく絵本の読み聞かせをしていました。絵本の「アンパンマン」（やなせたかし著、フレーベル館）は、テレビのアニメと違って、身を挺して人助けをするところが生々しく描かれていました。著者は、究極の正義とはひもじい人に食べ物を与えること、と語っています。アンパンマンは決して武器を使わず素手で戦うこと、ばいきんまんはばい菌であるが故に生命力が強く描かれているそうです。そう知って改めて読み返すと味わいが深まった気がしました。ただ絵本でありながら文字が多いのが難点で、読むのに苦労しました。飛ばして読むと結構子どもに気付かれます。その点「いない

いないばー」（松谷みよ子著、童心社）は文字が少なくて親子ともども喜べた絵本です。色々な動物が目隠した姿と「ばー」としている姿が1枚ごとに描かれています。ページをめくるタイミングが重要でした。

数年前から「ローマ人の物語」（塩野七生著、新潮社）を読んでいます。ローマの歴史を通して、人の生き方、地理や歴史を楽しみながら学んでいます。争った敵も同化することによってローマが大きく強くなっていく過程が面白いと思いました。カエサル、アウグストゥス等ローマ帝国の基礎を築いた人々も生き生き描かれていて、まるでドラマを観るようです。この本を読んでいたおかげで、五賢帝の一人ハドリアヌスが登場する映画「テルマエ・ロマエ」も楽しく観ました。強い生物ではなく環境に適応した生物が生き伸びるということを知ったことがあるのですが、ローマの歴史を見て納得した気がします。

最近読んだ本では「舟を編む」（三浦しおん著、光文社）が面白かったです。国語辞書を作る話で、用語の採集、掲載用語の決定、解釈、編集と辞書ができる過程が面白く描かれています。言葉にかける主人公の熱意とひたむきさに共感を覚えました。国語辞書ですから用語に意味を付けないといけません。例えば「右」。これを方角を使って説明するシーンが書かれています。辞書によっては、その本の奇数ページと説明しているものもあるようです。同書は映画化されていて、その中では「10の0の方」と説明する場面があって成程と思いました。普段日本語を使ってはいるものの、日本語のことを余り知らないことを認識させられました。

これからも、新しい出会いを楽しみにしつつ本と付き合い合っていきたいと思います。



私の一冊



齋藤 孝 著

読書力

岩波書店

私はこの本を読むまで、調べものをする、もしくは単に娯楽のために読書をしてきました。ですが、読書には「精神の緊張を伴う読書」があることを教えてくださいました。著者は「読書力」というものを定義し、読書の有用性を説きました。読書好きと「読書力がある」は違います。好きな推理小説を読み続けることは読書好きとは言えても読書力がある保証にはなりません。娯楽のためだけでは「精神の緊張」が伴いません。精神の緊張が伴えば、自己形成、コミュニケーションの基礎に読書が役立ちます。読書力を鍛えるプロセスがこの本には書いてあります。読書に対する価値観をこの本を読んで一度変えてみてください。

(機械工学科5年 徳久 真司)

【図書館所蔵情報】 ◇IW/R/801



川口 淳一郎 著

はやぶさ、そうまでして君は

～生みの親がはじめて明かすプロジェクト秘話～

宝島社

この本は2003年に内之浦宇宙観測所より打ち上げられ、約60億キロの宇宙航行から2010年に帰還し話題となった小惑星探査機「はやぶさ(MUSES-C)」の生みの親・川口氏が明かす7年間の宇宙航行の舞台裏を描いたものです。このミッションは構想18年、運用7年に至った大プロジェクトでNASAが未だに成し遂げていないサンプルリターン（惑星からサンプルを採取し地球に持ち帰ること）やイオンエンジン連続稼働時間大幅更新など偉大な成果を残しました。この偉業の裏には次々と発生するトラブルに正面から立ち向かう日本の技術者の姿がありました。困難や障壁が立ちはだかっても諦めない姿勢は技術者を目指す私達も見習うべきだと思いました。

(電気電子工学科4年 久富 貴弘)

【図書館所蔵情報】 ◇538/K/82



高島 敏男 著

漢字と日本人

文芸春秋

その昔、日本語には文字がなかったので、隣の中国から漢字を導入した。それが不幸の始まりだった、と筆者は言う。漢字を導入したことで、和語の発達は止まってしまい、今でも抽象的な事物を表す和語はほとんどない。さらに明治時代になると、西洋語を翻訳して新しい和製漢語が作られた。語のもつ音を考えずに作ったので、同音異義語が多く生まれた。結果として日本語は、文字なしでは意味がはっきりしない、おかしい言語になってしまったのだ。私は今まで当たり前のように漢字を使ってきたが、この本を読んで漢字に対する見方が変わったと思う。漢字を使うすべての日本人に読んでほしい一冊である。

(制御情報工学科4年 岩本 海童)

【図書館所蔵情報】 ◇購入予定





私の一冊



上橋 菜穂子 著
闇の守り人

偕成社

この作品は守り人シリーズ二作品目です。一作品目の精霊の守り人はアニメ化されたので知っている人も多いかと思います。女用心棒バルサが、養父ジグロの供養をするために、生まれ故郷カンバルに戻ると決心し洞窟へ入ります。そこでムサ氏族のカッサとジナを助けたことからこの物語は始まります。個人的に好きな場面は、バルサがヒョウル（闇の守り人）と槍舞いをしているところです。バルサの想いとヒョウル達の想いが真正面にぶつかりあうからです。読んでいて切なくなります。この作品も面白いのですが、守り人シリーズの他の作品も面白いですよ。ぜひ読んでみてください。

(生物応用化学科3年 木下 栞)

【図書館所蔵情報】 ◇913/Z-U/2



綾崎 隼 著
初恋彗星

株式会社アスキー・メディアワークス

愛した人にどんなことが起ころうと、きっとその愛は失われることなんがなく、ずっと想い続けていける。例え別の誰かに惹かれたとしても、愛していることに変わりはない。ずっとその人を愛している。そんな複雑で、曖昧で、切ない感情をいろんな観点から登場人物達は描いている。愛することの難しさ、偉大さを考えさせられる物語である。生きて、人を愛する上で大切な何かを教えてくれる残酷ながら美しい一作である。小学生の時に始まった四人の登場人物による物語。ある日、主人公の彼女の身に起こった不慮の事故で今までの彼女ではなくなってしまった。それでも主人公は「愛した人がどんな姿になろうとずっとその愛は失われることなくずっと忘れずにいられる。」と思い続けた。そんな主人公にずっと恋をしているちょっと風変わりな幼馴染、その幼馴染を振り向かせようとする主人公の友人。この四人の思い描く「愛」が交差し、複雑で、曖昧で、せつない感情を表現した一冊である。

(材料工学科4年 井上 愛可)

【図書館所蔵情報】 ◇購入予定



柳 広司 著
パラダイス・ロスト

角川書店

一大日本帝国陸軍内に極秘裏に設立されたスパイ養成学校、通称D機関。「死ぬな。殺すな。囚われるな」軍隊組織を真っ向から否定する戒律を持つこの機関をたったひとりの中佐が作り上げた一本書は、簡単に言えば、D機関に属するスパイ達が活躍するシリーズ小説で第3作目になります。1作目の「ジョーカーゲーム」、2作目「ダブル・ジョーカー」は全て短編であり、非常に読みやすいです。ただ、今回はシリーズ初の中編「暗号名ケロベロス(前・後編)」が収録されていて、スパイ小説ならではの緊迫した頭脳戦がさらに楽しめます。小説は苦手だけど、漫画の例えば「DEATH NOTE」が好きなら十分読める作品です。

(専攻科物質工学専攻1年 川端 将真)



リレー連載「古典への誘い」



古典幾何から現代幾何へ

一般科目（理科） 高橋 正郎

「古典への誘い」というリレー連載の原稿を頼まれたとき、非常に困ったのが正直なところである。まず、読書をほとんどしない私にまともな本のことは書けない。では、数学の本でなにかあるかと思っても、もともと、高専で教えている数学が200年以上前の「古典数学」である。そんなことを何人かの先生に愚痴を言っていたらありました。数学での古典中の古典が、それは、「ユークリッド原論」である。

「ユークリッド原論」は全13巻からなり、幾何だけでなく、数論も含まれ、ギリシャ時代の数学の基本的なものをまとめたものである。この本は二千年以上の長い間読まれてきた本で、「聖書」の次に読まれた本と言われている。イギリスの大学では、19世紀まで、「ユークリッド原論」を教科書に使っていたとのことである。今でも、中学で教える「幾何学」は「ユークリッド幾何」の初歩になる。そして、定義、公理（公準）から命題、定理を証明していくというスタイルは、現代数学でも基本的に同じスタイルである。

「ユークリッド原論」はいろいろな言語に翻訳されており邦訳もあるが、それは決して読みやすいものではない。実は、私もすべてを読んだわけではない。しかし、部分的には、現代人にも分かりやすく解説した本がいくつかある。その中の一冊で、「小林 昭七、ユークリッド幾何から現代幾何へ、日本評論社」を紹介する。

この「ユークリッド幾何から現代幾何へ」は4章からなり、ユークリッド幾何から始めて、最後には、20世紀の後半に証明された幾何の問題に導いていくのである。第1章では「ユークリッド原論」の第1巻の内容を解説している。第2章では、いかにして、非ユークリッド幾何が発見されたかということ、だれがどのように考えたかを解説している。第3章では、Einsteinの一般相対性理論でも使われたRiemann幾何の立場から非ユークリッド幾何を解説する。最後の4章で、20世紀の後半に解決した、Hilbertの第4問題を解説する。この本の第1章は高専に入学したての学生でも読める内容である。第

2章は高専の2年生なら読むことができる。そして、第3章と第4章は高専の4、5年生なら読める内容である。この本の特徴は、ユークリッド幾何から始めて、Hilbertの第4問題にたどりつくまで、数学者たちがどのように考えてきたのかを知ることができるように書かれていることである。

「まだ、数学って研究することあるんですか」という質問を学生からよく受ける。そのような疑問をもったら、是非、この本を手にとりて欲しい。この本をみれば、数学者はなにに疑問をもち、どのように疑問を解決してきたのかを感じられるのではないかと思う。そしてどのように数学を「研究」するのかを感じることができるのではないか。また、「勉強」と「研究」の違いも感じることができるのではないだろうか。

さて、この本の著者の小林昭七先生は世界をリードする幾何学者であったが、多くの学生向けの本も書かれている。その中から何冊か紹介しよう。まずは、「曲線と曲面の微分幾何」である。高専の3年までに習った数学の内容の簡単な演習となり、高専生にも薦められる。現代幾何は「多様体」とよばれる「座標1枚では表せない空間」の上で展開される。2次元の多様体が曲面である。この本は「多様体」を意識することなく、「目に見える曲面」から多様体の感覚を身に付けることができる本である。私も、大学生のときのこの本と出会いが、微分幾何を研究するようになったきっかけの一つであった。

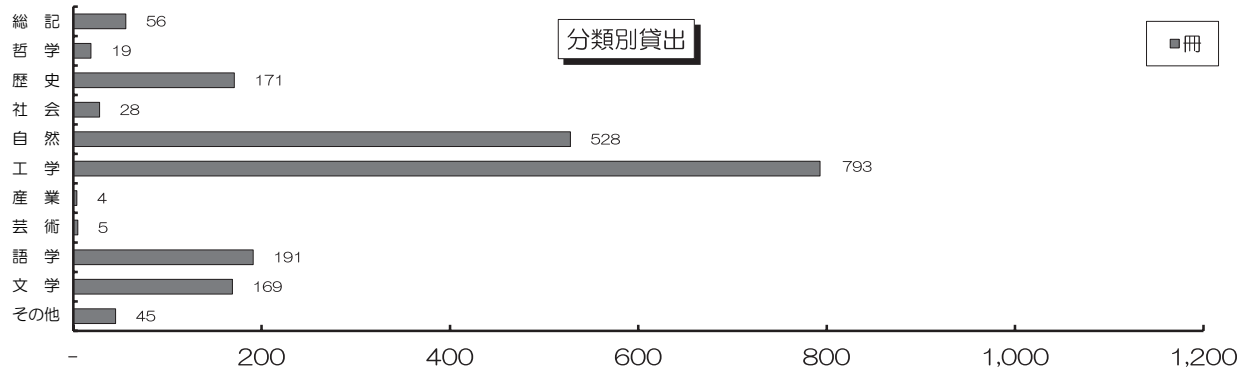
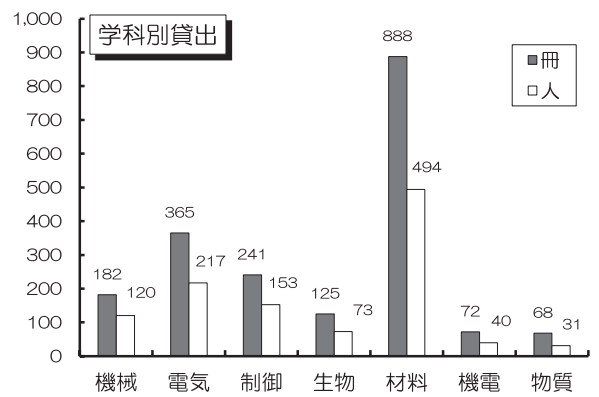
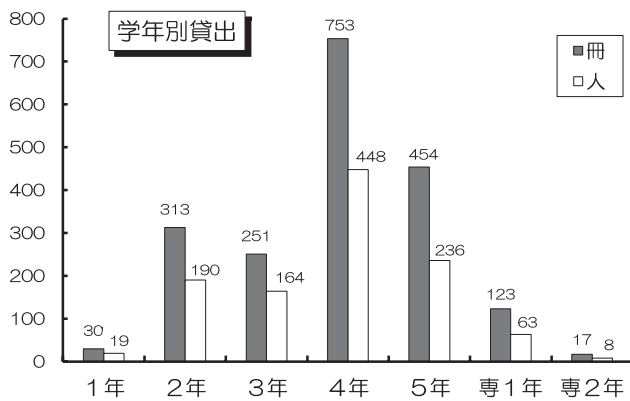
次に「微分積分読本」と「続 微分積分読本」をあげる。この本は高専で習う「微分積分」を数学的に厳密に書いている。数学専攻でないので、高専における微分積分の授業は計算中心の内容になってしまっている。その裏側にある「数学」を知ることができる手ごろな独習書ではないかと思う。

幾何学の世界で偉大な足跡を残された小林昭七先生は、昨年ご逝去された。ここにご冥福を祈る。小林昭七先生について知りたい人は、雑誌「数学セミナー、2013年2月号」をみてほしい。

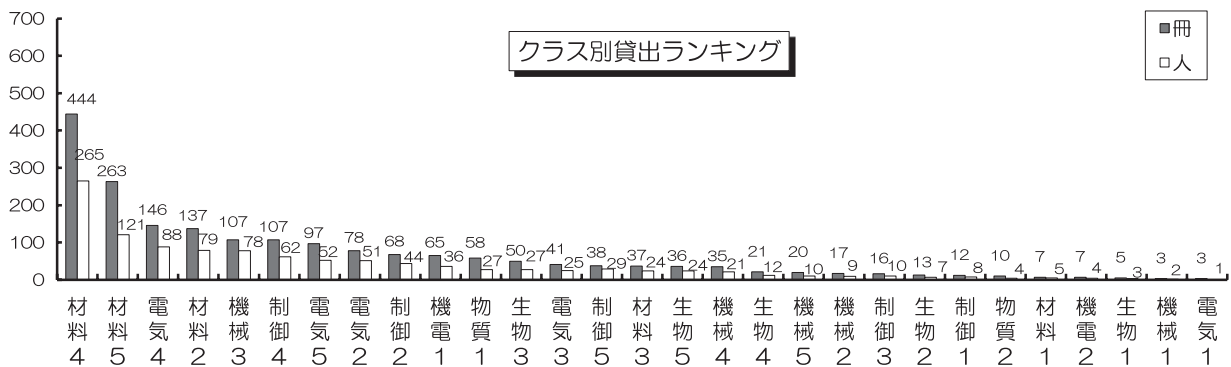
平成24年度後期 図書館利用状況

◆開館日数及び入館者数

月	開館日数	入館者数				一般利用者数 (内数)	一日平均入館者数 (四捨五入)	開館時間
		平日		土曜日	合計			
		時間内	時間外					
10	26	711	136	128	975	4	38	平日(時間内) 9時～17時
11	24	700	107	11	818	1	34	平日(時間外) 17時～20時
12	21	856	150	28	1,034	1	49	土曜日 9時～17時
1	20	945	278	45	1,268	1	63	※図書館改修等のため9/3～3/9は 仮図書館、3/11～4月上旬は休館
2	23	735	115	49	899	2	39	
3	8	104	19	13	136	2	17	
合計	122	4,051	805	274	5,130	11	42	



※ 分類別貸出冊数には、教職員及び一般利用者貸出冊数を含む。



information

夏季休業中の、開館時間の変更及び臨時閉館にはご注意ください。



◆特別（長期）貸出について

夏季休業中の特別（長期）貸出を下記のとおり行います。

- ・貸出期間 : 7月16日（火）から8月30日（金）まで
- ・返却期日 : 9月6日（金）
- ・貸出冊数 : 5冊以内

※一般利用者及び教職員は通常貸出です。

◆開館時間の変更及び休館日について

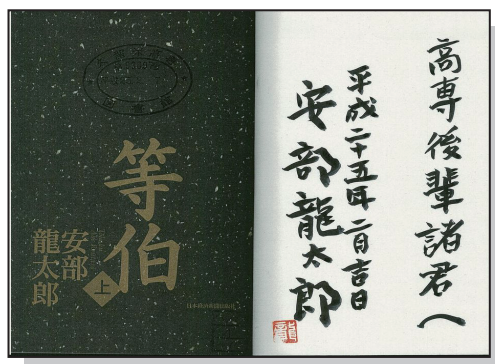
夏季休業期間中は、下記のとおりです。

- ・月曜日～金曜日は、9時から17時まで開館
- ・土、日曜、祝日及び8月12日（月）は休館です。



◆◆図書館からの知らせ◆◆

本校の卒業生である直木賞作家安部龍太郎氏より、サイン入り自著33作品40冊が寄贈されました。



《編集後記》

なんとか図書館だより82号をお届けすることができたようです。先生方や学生諸君に、図書にまつわる体験などを書いていただきました。本号を読まれた皆さん、楽しんでいただけたでしょうか。皆さんの、今後の読書の参考になれば、図書館だより作成に携わった者として、幸いです。

昨年度末に図書館が改修されました。2階にマルチメディア教室・PC学習室・コンテンツ制作スタジオを設置し、IT演習・語学演習の機能を持った情報センターとして生まれ変わりました。

このことにより、以前よりも幅広い利用が可能となりました。ぜひ活用してください。

図書館の利用について、また、読みたい図書についてなど、ご要望をお寄せください。今後の活動の参考にさせていただきます。

最後に、図書館改修の後処理などのため本号の作成開始が遅れ、執筆者、及び関係者の方々には大変ご迷惑をおかけしました。この場を借りて、お詫びいたします。

（編集委員長 山崎 有司）

発行日：平成25年7月8日

発行・編集：久留米工業高等専門学校図書館 Tel:0942-35-9306

〒830-8555 久留米市小森野一丁目1番1号

E-mail：L-staff.SAD@ON.kurume-nct.ac.jp